

令和7年度 南アルプス市立若草小学校学校評価 学校関係者評価書

令和8年2月27日(金)

学校関係者評価委員会作成

【第2回学校関係者評価委員会】

1 実施日 令和8年2月9日(月)午後2時より

2 会場 校長室 ※評価委員会の前に30分程度各教室を授業参観

3 参加者

○若草小学校運営協議員 《敬称略》

下今井地区副会長

上野 洋

主任児童委員

上田 美弥

薬剤師(小中一貫推進委員)

神宮司 泰子

マコト愛児園園長(小中一貫推進委員)

小俣 良子

若草小学校校長

石川 和樹

○学校職員

教 頭 有野 清美 深沢 俊一

主幹教諭 有泉 江里子

4 協議の内容

※学校評価の結果と改善策について説明後、意見交換を行った。

《○…委員からの意見・感想 ☆…学校の回答》

○児童・保護者アンケートともに「A判定」と概ね良好。しかし、詳細を見ると「学校が楽しい」等の項目で否定的な回答(1判定)がわずかに存在する。

☆高学年ほど学習内容や友人との関係づくりに悩むケースが見受けられる。あるいは登校を渋る児童も見受けられる。ていねいに話を聞き相談に乗ることで前に進めるようになる。一人一人に寄り添った指導を心がけていきたい。

☆放課後の個別相談や全教職員での情報共有を徹底し、「明日も来たい」と思える支援を強化する。

☆登校しても教室に入れない児童に対し、その根本原因(学習、友人関係、環境等)を継続して探り、個々の児童に応じた居場所づくりを進める。

☆来年度の学校経営について、学校教育目標を従来の「かしこい子」から、「自ら学び、深く考える子ども」に表現を改める。意図としては、主体的に学ぶ姿勢と思いやりの心を重視。多様な学び(静かな場、映像活用等)が可能な新校舎の環境を最大限に活かす。

また、「チーム担任制」を導入し、組織的に魅力ある学校づくりと教職員のウェルビーイング(働き方改革)を同時に進める。

○「自ら」という言葉は、個々の実態に応じた学びを象徴しており非常に良い。禁止事項で

縛るのではなく、自分で判断する力を育ててほしい。自分で気づき、考えることが自然にできる大人になってほしい。挨拶一つとっても「知らない人は危険」という画一的な判断ではなく、相手を正しく見極め、必要な時に助けを求められる力を養うべき。

また自ら考えるということから考えると、新校舎への移転を機に「ものを大切にする心」を育てるべき。「学校のもの=みんなのもの」という感覚を養うことが、将来的には社会的マナー（万引き防止や公共施設の利用マナー）に直結する。

☆弁護士による学習会などの機会も活用し、社会のルールや犯罪との関わりについても、発達段階に応じて指導していく。

○学校経営方針にある「目指す教職員像」の中の「地域の期待に応える」という表現は教員にとって重荷ではないか。「期待に応えられる（よう努める）」など、協力関係を示唆する柔らかな表現を検討してはどうか。

☆検討し、改めて提案させていただきたい。

○電話連絡の負担を減らすため、LINE等のSNS活用はできないか。

家庭で指導すべきことまで学校が担っている現状を改善すべき。

☆公教育の立場上、個人のSNS利用は制限されている。現在は一斉メール配信などを活用。

○保護者の中には「些細な連絡まで来る」と感じる層と「連絡がほしい」層が混在している。重要度の精査が必要。

○登下校の様子を見ると、班長が下級生を置いていく、指導が不十分などの姿が見られる。これは将来のリーダーシップ育成の機会。保護者にも登校班の目的を再周知すべき。

☆コロナ禍以降、縦割りの関わりが減少した影響もある。安全を守る役割を再度指導していく。

○校内で問題行動や気になる動きをしている児童を見かけた際、どう反応すべきか。

☆頭ごなしに注意するのではなく、まずは「関心を寄せる（目を向ける）」だけで十分。

☆人間関係がない中での注意は反発を招く。ただし、命に関わる危険な行為についてはその場で止めてほしい。

☆働き方改革については、絶対に先生方がやらなければいけないこと以外は減らしていくといい。地域と学校とで協力していくことが大切。保護者も子供をあずけて終わりではない。

*令和8年度学校教育目標、学校経営の基本方針について、承認された。

結論と今後の方向性

「自ら考える力」の育成は、学習面だけでなく、安全確保や公共心の向上、人間関係の構築すべてに通じるキーワードである。学校は「チーム担任制」等で体制を整え、地域・保護者は「学校に丸投げ」しない協力体制を構築し、双方向のウェルビーイングを目指していく。